

①体育 障害走「魔界からの挑戦」 実践報告 宮本(2年)

4月の子どもたちと比べると、自分の騒がしきで友達がしんどくなっていることなどに気づけるようにはなってきた。体育では、障害物をよけて走るなどの動きを「魔界からの挑戦状」として取り組ませ、自分の成長や友達によさを毎時間記す活動を行ってきた。核となる子が、運動が得意で、周りからの評価を得る機会が増え、通信でも子どもたちの記したものを紹介することで、時間を守れるようになる等の変容が見られた。

→1時間切りの活動ではなく、次時へのつながりをつくれるとよい。

☆上手な子は何ができているからか？できていないのは何が原因か？根本の分析をすることが重要。

→楽しさの本質は、技能が身に着くこと。技能が育つことで、子どもたちのつながりも深まる。

☆遊び的な楽しさではなく、自分の成長への楽しさ・わくわく感が大切。「仲間ともっと成長したい！」

②国語 「おむすびころりん」 実践報告・映像 池村(1年)

「おむすびころりんすつとんとん」の音読につなげたかったが、子どもから「おじいさんはおむすびをわざと落とす」という意見が出たため、そちらに授業の中心が流れてしまった。空想の世界で意見が出されていたので、「文に着目する」という視点を与えられなかったのが反省点。子どもの聴くことへの意識も弱かった。

→子どもの意見を「はい次」「はい次」と言わせて、最後にまとめをする司会が教師の役割ではない。

☆どこでどう子どもを導くか、教師の作戦が不可欠。子どもには「自分たちで解決にたどり着いた」と思わせる。

③国語 「こんなもの見つけたよ」 授業展開検討 畑(2年)

子ども達に「はじめ」「中」「おわり」の文章の組み立てに沿って、身近なものについて書かせる活動。どのような進め方でやっていけばいいか？中にはモチベーションの低い子もいる。

→☆誰に何を伝えるのかという目的意識をもたせる。そうでないと何を書こうかというテーマを見つけることからつまづいてしまう子もいる。

→一人一人で書き進めていくのではなく、一緒に「はじめ」を意識させて書かせていくなど、まずは書き方を教える。

☆書き方の手段を持っていないのでは、書くことが苦になる。難しければ友達のを借りる等、ハードルを低くして、「書けた」という成功感を味わわせる。

<日記> 中井先生

家でのことではなく、学校の学習の中(掃除も含めて)での自分の成長や頑張り、友達のいいところを毎日書かせていた。「1行でもいい。」「先生が見つけられていないみんなのいいところを、みんなが先生に教えて。」と伝え取り組ませていた。それを通信や帰りの会で紹介することで、書くことへの意欲も高まり、日常の姿にもプラス効果をもたらした。

④国語 「千年の釘にいどむ」 実践報告・映像 濱田(5年)

「納得のいく釘が完成したか、してないか？」という問いを、逆説「それでも」を使って解決していこうと試みたが、「普通は完成してるはずなのに、できてないから、もっといい釘を作ろうとしてる」という子どもたちの認識を崩すのに時間がかかってしまった。

→逆説を扱う前に、「納得のいく釘を完成させるまで・・・作り直した。」という文をきちんと扱っておけば、もうできているということは明確になる。子どもを文から離してしまっている。

☆文の構造を教師がしっかりとつかんで、子どもの意見に問い返していく必要があった。

⑤国語 「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」 解釈・展開案検討 生田（6年）

以前の三重の会での解釈では、雀の子がいる「そこ」は御馬が迫ってきており、そのままでは轢かれてしまう場所であり、近くにいながら助けられないのは、助けにいく時間の余裕がない切羽詰まった状況であるためということであったが、合同例会では、「御馬」は身分の高い人（殿様）が乗った馬であり、雀の子を助けるために馬の前に出ることが無礼にあたるという解釈であった。それを受けて、再度授業展開案を考えたが、「御馬」が証拠になることを子どもたちに気づかせ、話し合いの中で解決していくにはどうしたらよいか。

→まず、変だおかしいを出すときに、「そこのけそこのけ」と雀に言うことのおかしさが、どれほど重大なこととして子どもたちから出てくるか？「なぜ自分で助けない？」を中心に展開する方がすっきりするか？

☆イメージの違い（筆者はどこから雀に呼びかけてる？）から展開していく方がよいのでは。

→そもそも、「御馬」が尊敬の対象であるから、前を通ってはいけないという解釈で授業が展開できるか？歴史的な背景を知らなければ、教師が子どもに説明することでしかこの解釈に繋がらないのでは・・・

☆自分の納得のいく解釈でないと授業はできない。子どもの力を伸ばしていくには明確な作戦が必要。